北朝鮮が開発した核ミサイルが、半島有事での戦いを変える

――韓国に軍事侵攻して勝利する戦略が確立――

北朝鮮がこれまで開発してきた核・ミサイル、昨年発射したミサイルの狙いは何なのか。核開発と新型ロケットの開発、その性能とを合わせて考察すれば、核ミサイルの凍結どころではない恐ろしい戦略が見えてくる。

西村 金一
▶軍事・情報戦略研究所長、元防衛省・自衛隊情報分析官

北朝鮮は、二回の米国等との交渉の合意で、核ミサイルの凍結・削減することを約束した。しかし、金日成の時代から核兵器の研究を開始し、現在まで開発を進めてきている。ソ連邦が崩壊した後、一九九五年頃には数百万人の餓死者が出た。北朝鮮（以後、北）は、人民が飢えて死んでいっても、核ミサイルの開発を止めて、人民を食べさせるための費用を人民のために配分することはなかった。世界を相手に騙し、開発を継続して、今日に至っている。

その背景には、朝鮮戦争当時から今日まで、米国の核ミサイルの脅威を受け、核ミサイルを保有していなければ、米国から攻撃され、金体制が崩壊させられるかもしれない、と恐れを抱いてきたということがある。また、朝鮮半島を赤化統一するという国家最大の目標を達成するためでもある。

金正日が死去し、金正恩がトップに就いた時、北の軍事力は、中露では廃棄処分になっているような旧式で使い物にならない通常兵器と、命中精度が悪い旧式のスカッドとノドンミサイルだけを保有していた。核ミサイルもまだ保有していなかった。そのため、空中や海上で戦うことになれば、米韓軍が圧倒的に優勢であった。これでは、北軍が軍事境界線を越えて南侵すれば、米韓軍に短期間のうちに叩き潰される。北が「ソウルを火の海にする」と言っていても、韓国は恐怖を感じることはなかった。もしも、北軍がソウルに砲弾を撃ち込めば、米韓軍が反撃し、逆に平壌が破壊されるとわかっていた。

だが、金正恩がトップに就いてから、二〇一七年頃までに、核兵器および中長距離ミサイルをほぼ完成させ、半島有事の際、米軍の介入を抑止できる可能性が高まった。昨年になって、新型短距離弾道ミサイル等を完成させたことで、南侵する際、韓国を叩きつぶし、勝利できることが可能となった。敗北から勝利の道への大きな転換点になった。

さらに、南北会談などによる南北融和を利用して、南侵の際に大きな障害となる海上・陸上の軍事境界線にある障害を次々と取り除かせている。

北が、朝鮮半島における戦いの作戦戦略を一変させたこと、